



# 第22回日本検査血液学会学術集会 ランチオンセミナー3【ライブ配信】

## DOAC療法におけるエビデンスとしての 可溶性フィブリンモノマー複合体

日時

2021年9月11日(土) 12:10～13:00

座長

和田 英夫 先生 三重県立総合医療センター

演者

家子 正裕 先生 岩手県立中部病院

視聴方法や申し込み方法につきましては、第22回日本検査血液学会学術集会ホームページをご参照ください。

第22回日本検査血液学会学術集会の参加登録期間  
事前:2021年7月27日(火)～2021年9月10日(金)正午  
当日:2021年9月10日(金)正午～2021年9月20(月)

弊社ではWEB展示も予定しております。

werfen

## DOAC療法におけるエビデンスとしての可溶性フィブリンモノマー複合体

岩手県立中部病院 臨床検査科・血液内科 家子 正裕 先生

我が国においても血栓症は増加傾向であり、抗凝固療法を行なっている患者数も多い。経口抗凝固薬はワルファリンから直接経口抗凝固薬(DOAC)へと変わりつつあるが、ワルファリン療法では半世紀にわたって培われたPT-INRというモニタリング検査が容量選択エビデンスとして確立されている。個々の患者自身が有する凝固活性や抗凝固活性は異なっており、DOAC療法においても効果のエビデンスとなる確認試験はやはり必要である。DOAC療法における出血リスクはPTまたはAPTTが参考となる。一方、血栓リスクはむしろ血栓マーカーを利用することが推奨される。

血栓マーカーの一つである可溶性フィブリンモノマー複合体(SFMC)は、モノクローナル抗体の性質から2種類に大別される。SFMCはフィブリンモノマー(FM)1分子とフィブリノゲン(Fbg)2分子の複合体(Fbg-FM-Fbg)が最も安定しているとされ、可溶性フィブリン(SF)試薬はその複合体を測定する。しかし、血中での凝固反応は様々な段階が混在している。SFMCや安定化フィブリンは二次線溶反応の場となっており、FMはFM自身や様々なFbg関連蛋白とも複合体を形成する。それらを検出できるのがフィブリンモノマー複合体(FMC)試薬であり、SFMCの精密検査として扱われる。

Fbg-FM-Fbgは血栓材料となり、SF試薬は血栓形成予知マーカーとしての可能性がある。FM-Fbg関連蛋白の複合体は血栓材料とはならないが、それらの存在は凝固亢進を意味する。FMC試薬はFM産生の大部分を反映し、凝固亢進を正確に示唆する可能性がある。したがって、抗凝固療法において抗凝固薬の効果を確認する検査として、FMCは極めて有用と思われる。

本講演では、DOAC療法における確認試験の実例に触れつつ、2種類のSFMC試薬の使い分けなどを解説したい。

共催 第22回日本検査血液学会学術集会 / アイ・エル・ジャパン株式会社

werfen

アイ・エル・ジャパン株式会社

〒108-0073 東京都港区三田一丁目3番30号 三田神田ビル  
〈カスタマーサポートセンター〉 ☎ 0120-274-011

E-mail: info-japan@werfen.com URL: <https://www.werfen.com/jp>